



ちこり村、 「認知症カフェ」開催

厚生労働省によると、認知症患者は、2025年には約700万人、65歳以上の5人に1人になる見込みだという。認知症とは、認知機能の低下によって日常生活や社会生活を送りにくくなった状態を指す。アルツハイマーのように治らない種類もあるが、軽度認知障害（MCI）のうち、早めに受診したり、周りの人が正しい接し方をすれば、進行を遅らせたり、完治させたりできる。

家族の力が必要な農業においても、地域づくりにおいても、今後は認知症に向き合うことが不可欠になっていくだろう。その準備を始めた岐阜県の「ちこり村」の例を紹介する。

認知症の人を支える 地域づくり

岐阜県中津川市のちこり村で「認知症サポーター養成講座」と「認知症カフェ」が7月11日、地域の人々を迎えて開催された。中津川市では厚生労働省の推奨の下、「認知症の人を安心して暮らせるという町づくり」を掲げ、この2つの活動を展開している。認知症の知識や予防方法、認知症の人たちとの接し方を学ぶものだ。

認知症サポーター養成講座では、中津川市の小川智江氏が認知症の知識や認知症の家族との接し方などを

説明し、ひだまり園在宅介護支援センターの今井一貴氏が、ジャンケンゲームや、歌いながら手足を動かす予防方法を伝授した。また、レジやゴミ出しなどの場面を例に、認知症の人にどう接したらよいか紹介する映像が上映された。

続いて、ちこり村のレストランの一角で、認知症カフェが開催された。参加者たちは、飲み物とオリジナルの野菜スイーツを楽しみながら、認知症への知識を深めた。また、日ごろ簡単にできる予防方法として、「五感健康法」推進員たちが五感を駆使したレクリエーションを紹介した。参加者たちも一緒に体験し、終始、笑い声が絶えない和やかな会となった。

地域の人々が 集う場を提供

ちこり村は、チコリの生産ファームに、チコリ芋の焼酎蔵、自社開発商品などを扱う売店、地域の野菜を中心としたビュッフェスタイルのレストランなどを併設した教育型観光生産施設だ。ちこり村を運営する(株)サラダコスモは無添加・無漂白の発芽野菜の生産で成長を遂げ、06年、農産物の国産化と高齢者が働く場の提供を目指してちこり村を開設した。いまでも地域の60歳以上の従業員が多く活躍している。



認知症サポーター養成講座の様子

中津川市の小川氏が、公民館以外でも認知症への取り組みをしたいと商工会で呼びかけたところ、ちこり村支配人宮川真一氏が快諾し、今回の取り組みが実現した。

「すぐ『やります』と手を挙げました。ちこり村に認知症のお客様がいらしたときに、私たちも支えになれるよう知識を持つておこうと思いましたが、また、このような民間のカフェなら、地域の皆さんも集まりやすいと思います」（宮川）

予想どおり、この日は従業員8人を含め市民50人ほどが詰めかけた。

ちこり村では、この日をきっかけに、毎月1回第4火曜日に「認知症カフェ」を開催することになっている。

（平井ゆか）